

半田久美子¹: 報告 - 第10回国際花粉学会議および巡検Kumiko Handa¹: Report—The 10th International Palynological Congress and its excursion

第10回国際花粉学会議 (IPC) が中華人民共和国南京市で2000年6月24~30日の7日間にわたって開催された。会場は南京市中心部に位置する5つ星ホテル金陵飯店である。登録者はおよそ300人、女性が参加者の半数近くを占める。主催国である中国からの参加が多いのはもちろんだが、ロシアや東欧諸国からの出席者が多く見られた。東南アジアからは少なく、マレーシア、ベトナム、フィリピン各1名。東アジアでは中国、台湾のほか、日本からおよそ20名が出席した。

24日に登録、評議会、開会式、歓迎会が行われた。開会式では次期役員決定の報告(詳細はホームページ<http://www.geo.arizona.edu/palynology/plns0600.html>参照)とともに、次回のIPCは2004年にスペインのグラナダで開催との発表があった。

25日午前中に招待講演が3つ行われ、午後から一般講演が始まる。口頭発表、ポスター発表ともにセッションに分けられ、シンポジウム形式で行われた。会場は大2,小2の計4つで、26日から小会場ひとつがポスター発表会場にかわった。開催されたセッションは以下の通り。

- 1) Pollen Morphology, Systematics and Evolution
- 2) Quaternary Palynology in the Middle and High Latitudes of Asia
- 3) Paleozoic Palynology
- 4) Mesozoic-Cenozoic Marine and Non-Marine Dinoflagellates
- 5) Aerobiology, Medical Palynology and Entomopalynology
- 6) Palynological Evidence for Monsoon Activity and Impact in the Late Cenozoic
- 7) Ecology and Paleoenvironment
- 8) APD Symposium: Pollen Date Bases and Global Change in the Monsoon Areas
- 9) Microphyte Fossils and Acritarchs
- 10) Long Terrestrial and Marine Records of Paleoclimate
- 11) Pollen Exine
- 12) Palynostratigraphy and Sequence Stratigraphy
- 13) PSC Symposium (in Chinese)
- 14) Mesozoic Palynology
- 15) Cenozoic Palynology
- 16) Quaternary Palynology
- 17) Archaeological Palynology
- 18) Important Palynologic Events and Stratigraphic

Boundaries

19) Polar Palynology: Arctic, Antarctic and Qinghai-Xizang (Tibet) Plateau

20) New Technology

一般講演はキャンセルが目立った。花粉形態のセッションに参加したが、3番目の発表からはじまったので驚いた。事前に発表日の連絡がなかったことが原因か。また、キャンセルがあると次の発表を繰り上げてしまうことが多く、聞きたい講演がいつあるのかわかりにくかった。ポスター発表は半日だけの掲示であったが、口頭発表の時間は25分と長めに設定されており、議論の時間を十分にとれた。スライドで分類群不明の花粉化石550個を見せたつわものもいた。口頭発表ではスライドやOHPを使うのがふつうだが、今回はパワーポインターを活用し、コンピューター画面を投影して発表する中国人が目立った。今後発表はこのような形式に変わるのだろうか。それから講演は英語で行われたが、英語の苦手な発表者のためにディスカッションをフランス語で行ったり、日本語-英語の通訳を買って出る人がおり、議論を活発にしようとする雰囲気を感じられた。

Mid-congress tour は27日に1コース行われ、バス4台に分乗して、南京の観光地(Tablet Mausoleum, 中山陵, 美齡宮, 中山植物園, 明孝陵, 夫子廟)と主催者である中国科学院南京地質古生物研究所を見学した。中国の歴史を学ぶとともに、参加者同士の親睦をはかるよい機会となった。

一般講演は30日午前で終了し、夕方に会場を変えてシェラトンホテルで閉会式と晩餐会が行われた。会期中はラフな服装の人が多かったがこの時はドレスアップ、雰囲気が変わる。南京でのIPCの成功を祝うと共に、次回開催地スペインの代表者から挨拶があり、観光ビデオが上映された。

巡検は会期前後に12企画され、そのうち以下の6つが実施された。

Pre-congress Field Trips

A1: Kaifeng-Xi'an archaeological palynology

A2: Mesozoic-Cenozoic stratigraphy of North Xinjiang, Northwest China

A3: Kunming-Xishuangbanna, Southwest China

Post-congress Field Trips

P1: Quaternary and Recent Vegetation of Changbaishan

P4: Trans-Himalayas Excursion

P5: Yichang (Three Georges of the Yangtze River)



図 1 突出木 *Shorea chinensis* にかげられたキャノピーウォーク。

このうち筆者の参加した A3, P1 について報告する。

A3は雲南省西双版纳の熱帯雨林を訪れる巡検で、参加者は8人(中国2, 日本3, カナダ, オランダ, コロンビア各1) 集合日が1日早まるが全員そろそろ。飛行機とバスで現地へ向かう。西双版纳熱帯植物園昆明分部朱華教授(tropical botanist)の案内で、いくつかのタイプの熱帯雨林を観察した。突出木として *Pometia tomentosa*, *Terminalia myriocarpa*, *Semecarpus reticulata* を含む熱帯雨林, これに *Shorea chinensis* を交える熱帯雨林, 石灰岩地帯の熱帯雨林, 森林の垂直分布を観察。熱帯雨林は標高の低い谷沿いに発達し, 斜面は Fagaceae, Magnoliaceae, Moraceae, Theaceae 等からなる常緑広葉樹林になる。林床に落ちているフタバガキの果実を初めて見た時には感激した。植物の名前や生態も教えていただき有意義な巡検となった。西双版纳の観光開発は急速に進んでおり, 今回見学した熱帯雨林はトレイルが整備され, キャノピーウォーク(図1)も2カ所あった。熱帯植物園にはホテルが併設されており, 観光客が宿泊できる。空港のある景洪にはホテルが建ち並び, 昆明から景洪に向かう飛行機は夕方だけで3便もあった。景洪に空港ができるまでは西双版纳は秘境であったが, 現在は日本からも観光で行けるところとなったようだ。最終日は昆明で石林を観光する予定だったので, 添乗員と交渉し半日を澄江化石動物群の見学に変更。追加料金が必要だったが, カンブリア紀の化石産地を見学できた。

P1は長白山の植生と完新世の花粉分析地点である Jinchuan 湿原を見学する巡検である。外国人参加者は7人(日本3, フランス, オランダ, ポーランド, イギリス各1), 中国人は案内者も含めて10人くらいであった。こちらは旅行社がつかず, マイクロバス, 宿泊, 食事等すべての手配を中国科学院植物研究所の孫湘君教授と国家自然科学基金委員会地球科学部宋長春博士が行う。集合場所の吉林省長春市までの飛行機やホテルの予約は各自でという案内があったが, これも手配してくれた。初日は長春で偽皇宮陳列館を見学, 2日目に Jinchuan 湿原を見学, 3日目に中国科学院長白山開放研究所に到着, ゲストハウスに宿泊する。所長の代力民教授, 副所長の郝占慶教授には植物の解説もしていただき, 大変お世話になった。長白山は標高 2744 m, 車道が整備されており山頂付近まで車で上がる。火口湖天池の対岸, 北朝鮮を眺めてから北側へ下りる。歩道はなく, 咲き誇る高山植物 *Dryas octopetala* var. *asiatica*, *Papaver pseudo-radicatum* などを踏み分けながら下山。標高 2000 m くらいから矮生の *Betula ermanii* が出現, 樹高が高くなるにつれて, *Alnus mandshurica*, *Populus*, *Larix olgensis* 等が混じりはじめる。*Betula ermanii* はだんだん *Larix olgensis* と置き換わり, 標高 1800 m 付近から *Picea jezoensis* var. *komarovii*, *Abies nephrolensis*, *Pinus koraiensis* を主とし *Larix olgensis*, *Pinus sylvestris* var. *sylvestrififormis*, *Acer ukurundues*, *Lonisera eduris* を交える暗針葉樹林にかわる。標高 1150



図2 長白山北斜面の炭化材の露頭。

m 付近からは針広混交林になり, *Quercus mongolica*, *Tilia amurensis*, *Ulmus japonica*, *U. asiniata*, *Fraxinus mandshurica*, *Juglans mandshurica* などの落葉広葉樹をまじえる。高さ34 mの林冠観察タワーから林冠を見下ろすと, *Tilia amurensis* の果実と翼の黄色が目立ち, 花が咲いているように見える。保護区内には永久プロットが数カ所設けられ, 胸高直径8 cm以上の木を5年ごとに調査しているとのこと。それから最後に長白山の火山灰に埋もれた炭化材を見学した(図2)。火砕流で流されて堆積したもので, 立ち株はみられなかった。この地点の炭化材は *Pinus koraiensis*, *Abies holophylla*, *Larix olgensis*, *Tilia amurensis*, *Betula costata*, *Fraxinus mandshurica*,

*Padus asiatica*と同定されており, 放射性炭素年代測定の結果は 1050 ± 70 yr B.P.である。現在は *Larix olgensis* の疎林となっている。このほか, バスでの移動の途中でチョウセンニンジンやキクラゲの栽培の様子も見学した。野菜の豊富なおいしい食事, 意外と質素な弁当(パン, ソーセージ, ゆで卵, トマト), 甘い中国ワイン, 中国式乾杯で羽目を外したことも忘れられない。歓迎してくれた中国の方々に感謝する。

(¹ 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6 兵庫県立人と自然の博物館 Museum of Human and Nature Activities, Hyogo. Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo 669-1546, Japan)